

Google Scholar<sup>※</sup>のトップページに「巨人の肩の上に立つ」とあります。学術分野、特に科学技術の分野でよく使われるこの言葉は、アイザック・ニュートンが用いて有名になったと言われています。「自分の業績は誰かの業績の上に乗っていて、さらに自分が成し遂げた事も次の世代の礎になる」という意味です。先人たちを巨人になぞらえたのですね。この考え方は、学者や研究者を中心に浸透しています。

原文は、*"If I have seen further, it is by standing on the shoulders of giants."* 「私が遠くまで見渡せるのだとしたら、それは巨人の肩の上に立っているからです。」ここで、巨人が giants と複数形で扱われていることにお気づきかと思います。たった一人の巨人に固執するのでは意味がなく、ニッチな領域もまた、多くに触れたからこそ発見できるわけです。巨人たちもまた、たくさんの巨人たちの肩の上に立ってきたに違いありません。

凡そ、この世にある学問や研究の成果は、長年に渡る先人たちの努力の積み重ねによるもので、一人で成し遂げられるものではありません。研究とは、根拠をもって何かを明らかにし、新たな知を産み出すこと。何かを明らかにするために、何がわかればよいのか、どのような方法を取ればよいのか、得られた結果から何を導くのか、そのような問いかけの連続で、必ず誰かの成果の上に乗っています。いかに偉大なノーベル賞級の研究であっても、先人たちの肩の上に乗ったからこそ成し得たのです。もしもたった一人の努力によるものだったとしたら、科学は発展しえなかったでしょう。

皆さんは、なぜ大学に行くのでしょうか。そしてなぜその大学、なぜその学部を志すのでしょうか。興味・関心のある専門分野を学ぶため？様々なスキルを身につけるため？就職に有利だから？4年間のモラトリアム？理由は、それぞれかもしれませんが、ここを見誤ると大変なことになりかねません。学問を続けることは、巨人の身体を少しずつ登っていくのに似ています。はじめは自分の背丈ほどの高さからだった狭い視野が、高く登っていくにつれて徐々に広がり、そして巨人の肩に立つ頃には、地平線の彼方まで見渡すことができるようになっていくのかもしれませんが。学問や研究をすることは、どんよりと、もやもやとしていた雲や霧が晴れて、ずっと遠くまではっきりと見えるようになるのと似ています。進路選択の根底には、探究があります。巨人の肩の上に立って、問い続けてください。

*Touch the Sky! TOYOTAMA!*